

優填王所造栴檀釋迦瑞像歴記

— 附 西郊清涼寺瑞像流記 —

こゝに紹介するのは「優填王所造栴檀釋迦瑞像歴記」と、その末尾に加えられた「西郊清涼寺瑞像流記」である。旧九条家の蔵本で、鎌倉期古写の善本、一卷である。「歴記」はすでに京都嵯峨清涼寺の蔵本によつて、「大日本佛教全書」（遊方傳叢書第二）のうちに収められているが、誤字、脱文、錯簡などがあり、正しい姿を伝えておらず、また「流記」は新出のものであるので、大方の知見に供することとした。

まず瑞像と清涼寺についてふれておく。優填王は、中印度にあつたといわれる憍賞弥国の王で、釈迦の外護者として著名である。この王が牛頭栴檀の香木で釈迦の生身を模刻したものが栴檀釈迦瑞像であるとされるが、紀元前五世紀頃のことと、その経緯については諸説あつて定かではない。この印度所造とされる瑞像は、その後鳩摩羅琰（名僧鳩摩羅什の父）によつて天山南路、いわゆるシルク・ロードを通つて西域亀兹国に運ばれた。こゝから前秦の符堅の将、呂光によつて中国に伝来、六朝の興亡常なき戦乱の中を諸国に流転、江南楊州の開元寺に安置された。

こゝに安住の地を得たかに見えたこの像は、唐末五代の乱に遭遇、南唐、金陵の建業城中の長先寺に移された。さらに南唐を亡した宋の太宗が東都梁苑城の開宝寺永安院に移し、のち太祖皇帝が宮殿内の滋福院に置いた。

わが国東大寺の僧裔然（九三八—一〇一六）の一行が、永觀元（九八二）年入宋したが、その目的の一つにこの像の礼拝（裔然らは開元寺に安置されていると考えていたが、当時は滋福院にあつた）があつた。裔然はこの像を模刻して日本に将来した。京都愛宕山を中国五台山に擬し、この像を本尊としようとしたが果せず、弟子盛算（一〇一九—五十九才）が志を継ぎ、山麓栖霞寺内の釈迦堂に安置、清涼寺と号した。現清涼寺に安置されている国宝釈迦如来立像が裔然将来の像で、髪形、手印、衣文などに著しい特徴をもち、わが国仏像彫刻の一祖形（清涼寺式釈迦）となつた優品である。しかも昭和卅年、この像の胎内から発見されたおびたぐしい納入品は、十世紀における彼我の信仰の実態を示すも

のとして注目された。なかでも、生身の釈迦像としての認識から、像内に人体の内蔵を形どつた絹製の具があり、医学界の関心をも惹くことゝなつた。

つぎに本書の構成についてみよう。「歴記」と「流記」の二部からなつてふれたが、前者はさらにつぎの二篇からなる。

(一) 梅檀釋迦文像略讚(後周顯德五年 金陵長先寺徒南述)

(二) 優填王所造梅檀釋迦瑞像歷記(後唐長興三年 江都開元寺十明述)

(一)の著者を本書は「徒南」とするが、本書「流記」の引用文中に「楚」とあり、流布本も「楚南」としている。楚南については杭州慈雲院の住僧が著名であるが、年代的に合致しない(八九三年没)。楚、徒いづれとも決し難いが、一応徒南としておく。

成立年次から(一)の順で著述されたが、(一)が比較的短文なため省略されて(二)が代表書名となつたと思われる。もともと成立年次、場所、著者を異にするこの二篇は、像の流伝にしたがつて合括されたものらしく、二篇の末に、北宋太平興国九(九八四)年、東都開宝寺永安院における注記が加えられている。「歴記」と総称されるこの書を日本に伝えたのは裔然の随行僧盛算で、北宋雍熙二(九八五)年、永安院からこの書を借り出し書写した旨の奥書が記されている。さらにこの奥書に一行おいて、「先師法橋上人」で始まる裔然の入宋から、瑞像の摸刻、わが国への運搬等の記文がある(雍熙三年)。署名はないが、裔然を先師と呼び、文中の盛算に敬称等が見えないところから、この記文も盛算としてお

く。以上が「歴記」の構成であり、これに続いて雍熙三年、日本年号寛和二(九八六)年から二百九十五年後の弘安四(一二八二)年、清涼寺の僧顯意(一二三九—一三〇四)によつて書かれたのが「流記」である。これは「歴記」をもとに取意し、さらに摸刻像の日本における消長を略記したものである。

つぎに書誌についてふれよう。本書は、旧九条家本、卷子、一卷、函号九—一二、鎌倉期の写本である。紫巻紐および巻軸は当部後補。表紙は楮紙、江戸時代初期の九条家の当主道房によつて補われたものである。縦三十一・二厘、横廿五・九厘、打つけ書の外題は道房の筆である。本文料紙は、やや艶のある楮系紙、廿六枚。一紙縦三十一・二厘、横四十八厘(第一紙、第廿五紙がやや短い)。料紙全部に墨界野が施されている。上部に二界、下部に一界、第二・第三界間に縦野を引く。上辺から約四・四厘の箇所第一界、この界線より約一・八厘の箇所に第二界、第三界は下辺より約一・三厘の箇所にある。野間は約二・三厘。一紙は通常廿一行の行間がある(第一は十七行、第廿五紙は十九行)。記載は、本文第一紙端裏に、本文と同筆跡で「歴記」の二書の名を小さく書く。本文は、第一界下から書名、本文を書き出し、第二界下から「歴記」の二人の著者名、盛算の書写奥書、「流記」末の注記を書く。書風は僧侶の筆跡を思わせる特徴ある書体で、当部に蔵する旧九条家本「四天王寺流記」(函号九—二四)と同一人であるが、人名は明らかではない。なお「歴記」には、返り点、送り仮名、振り仮名、声点、連読符、

音韻、字義、注記などが付され、書ききれない音韻、字義、注記などは該当箇所の上欄外に書かれている。これらは「流記」を著した顕意が付したのか、顕意とは無関係のものか、全く明らかではない。しかし、これらの音訓等は鎌倉期の貴重な資料となるものであろう。たゞ、本翻刻では多く省略せざるを得なかった。

凡 例

- 一 使用漢字は原則として正漢字を使用したか、便宜漢字や仮名等で通行字に改めたものがある。
- 一 返り点（「レ」「一」「二」）、声点、連読符等は技術的なこともあつて省略した。
- 一 上部欄外の注記等は番号を付し、末尾にまとめた。
- 一 私意によつて句点を加え、改丁は『で示した。

(平林 盛得)

(表紙)
梅檀釋迦文像略讃

(本文裏) (像力)
梅檀尺迦文□略賛 優填王所造梅檀尺迦瑞像歷記

(本文)
梅檀釋迦文像略讃

金陵長先精舍講法花經成唯識論大德賜紫徒南述

夫梅檀像者即釋迦牟尼佛眞容也、昔優填王時、佛在忉利宮、爲母摩耶說法、緣下方無佛結夏、目連乃縱ホシキマ、ニシ、无碍之威、舉ケテ神通之力、攝シテ三十二匠、往其宮刻其像、及觀テ上ルニ佛威靈、如千日換然、莫能定之、遂乃哀訴シテ聖覺、請入シテ水光ニシテ三昧、一日而得其相焉、匠乃斧造畢相好端嚴、既終ニヘテ剗コト能功、而證阿羅漢果、佛即與像摩頂授記、汝後令流于東土、即今震旦國也、後至七月十六日、自忉利天降于中天、優填王與像同迎而獲其瞻禮焉、後鳩摩羅琰法師背負其像來自中天、晝則僧負像、夜乃像負僧、遠涉艱難、无勞スルコト嶮阻、至于龜茲國、緣師有貞王納爲駙馬、而有遺躰子、即鳩摩羅什也、後秦主苻堅拜呂光爲將軍、討獲

西戎、破龜茲國、奪像并師羅什同歸東土、後至隋煬帝駕幸

楊州、遷至于開元寺、建閣供養、迄于今日、其諸國邑求

頂拜无因、此土之人以爲常矣、但以輒與愚意特叙其由、

同舉勝因勸諸深信、每至一十五日蔬食兩朝、虔心禮謁、若以

家緣稍重因事、去不獲者、勸請供養、此真與禮閣无

減焉、事有正記、今則略而叙之、聊爲讀曰

妙矣金仙ナルカナ山イ可廣シント云フ可大シナリト云フ色相圓明ニシテ威靈自在也

爰有目連ナルカナ山イ神通普會ニシテ刻佛眞容ニシテ傳于沙界ヘタリ

說法切利ヲ降像中天ニ始于羅琰ニ遇以優填ニ

與我受記メニカシテ言流下フルヘント眞丹ニ後當煬帝ニ遷至開元ニ

群生瞻禮シテ永結良緣ニ隨煬或本ニ

大同顯德五年夾鍾月養生八葉記之

(以下六行アキ)

(頭注1~2便宜コ、ニ掲グ)

頭注1 刮刃曲也クニツ 頭注2 駙扶過反駙馬官

(二行アキ)

優填王所造栴檀釋迦瑞像歷記

江都開元寺講經論內殿倍促賜紫沙門十明上陪從歟

栴檀釋迦文佛造像、請經說不同矣、今據阿含經說、釋迦如

來爲母摩耶、說カントシテ法從祇洹精舍往至三十三天、善法堂有

金石、世尊石上結跏趺坐、余時摩耶頭面禮佛足、佛說法時、

諸天得益、時如來母即從坐起禮如來足、還入宮中、是時人間

四部之衆、不見如來渴仰愁憂、時波斯匿王、優填王問阿難曰、

如來今日意爲所在、阿難報曰、大王我亦不知如來所在、

是時二王思覩如來、遂得苦患、余時優填王勅國界內諸奇

巧師匠、而告之曰、我今欲作佛像、即以牛頭栴檀、作上ルコト

如來形像高五尺、是時波斯匿王聞優填王作如來形像高五

尺而供養、是時波斯匿王復召國中巧匠而告之曰、我今欲

造如來形像、汝等當時辨之、時波斯匿王而生此念、當用

何寶作如來形像耶、斯須復作是念、如來形體黃如天金、

今當以金作如來形像、是時波斯匿王純以紫磨金作如來像、

於時世尊告四部衆、諸賢當知却後七日、如來當下至下フヘシ閻浮

里地僧伽尸國大池水側、余時帝釋告自在天子、從須彌山

頂至僧伽尸國池水、作三徑路、謂金・銀・水精、是時如

來從金道下池水側、時五王徃世尊所、僧伽尸國波斯匿王、

拔嗟國優填王、五都人民之主、惡生王、南海之主、優陀延王、

摩竭陀國頻婆娑羅王、頭面禮佛足、余時優填王并所造牛頭栴檀像、往如來所、而以伽陀向世尊說、

我今欲所問、慈悲護一切、作佛形像者、爲得何等福利、

余時世尊以偈報曰、

造佛形像福、餘福不可計、其福不思議、名聞遍四遠、眼根

永不壞、後得天眼通、形體當完具、終不墮惡趣、

余時優填王極懷勸悅、不能自勝、於時五王白世尊言、當云

何造立神寺、余時世尊申右手、從地中出迦葉佛寺、視

五王而告曰、欲作神寺、以此爲法、時五王卽於彼處、起大

神寺云々

觀佛三昧經曰、佛母摩耶生忉利天、是時如來昇忉利宮、爲母

說法、余時優填王戀慕世尊、鑄金爲像、聞佛當下、象載

金像來迎世尊、余時金像從象上下、猶如生佛足步、虛空、

足下雨花、亦放光明來迎世尊、時鑄金像合掌叉手、爲佛作

禮、余時世尊亦復長跪、合掌向像、時虛空中百千化佛、

亦皆合掌、余時世尊而語像言、汝於來世大作佛事、我滅度後、

我諸弟子、以付屬汝、若有衆生、於佛滅後、造立形像、幡花

衆香持用供養、是人來世必得念佛清淨三昧云々

造像功德經云、余時世尊在三十三天波利質多羅樹下、三月安居、爲母說法、余時閻浮提中无有如來、辟如暗夜星中无月、

如國无君、如家无主、是時衆生孤獨无依、皆於如來心懷

戀慕、生大憂惱、如喪父母、如箭入心、共往世尊所

住處、園林亭宇悉空、無佛、倍加悲戀、不能自止、余時優陀

延王心作是念、我今應當造佛形像禮拜供養、卽時告勅國內

所有工巧之人、並令來集、既來集已而語之言、誰能爲我造

佛形像、諸工巧人共白王言、假使毗首羯磨天而有所作、亦

不能得似於如來、我若受命造佛形像、但可模擬螺髻白毫

少分之相、諸餘相好光明威德誰能作耶、世尊會當從天來

下、所造形像若有虧誤、我等名稱並皆退失、竊共籌量

无能敢作、復白王言、今造像應用純紫栴檀之木文理體質堅

密之者、但其形相爲坐爲立、高下若何、王以此語問諸

臣衆、有一智臣、前白王言、大王當作如來坐像、何以故一

切諸佛得大昇、轉正法輪、現大神通降伏外道、作大佛

事皆悉坐故、是以應作坐師子座、結跏趺坐之像、余時

毗首羯磨天卽變其身、而爲匠者、持諸利器具白王言、我今欲

爲大王造像、余時王心大欣慶、與主藏大臣、於內藏中選

擇香木、肩荷負與天匠、而謂之言、善哉仁者當用此木爲

我造像、令與如來形相似、余時天匠操斧斫木、其聲上徹三

十三天、至佛會所、以佛神力、聲所及處衆生、聞者罪垢煩惱

皆得消除、是時天匠運其工巧、專精匪懈、不日而成、其

像跏趺坐、高七尺、面及手足皆紫金色、時優陀延王見像得

成、相好端嚴、心生淨信、獲柔順忍、既得忍已益加欣慶、所

有業障及諸煩惱、并得消除、辟如日出、霧露皆盡、唯除一

業現身受者、以會於聖人起惡語故、余時佛告大目犍連、汝

可先往閻浮提、問訊四衆作如是言、一切衆生憶念我者、咸

應集會僧迦尸國、却後七日皆當見我、余時毗首羯天并諸天

衆、知佛將欲下閻浮提、作三道寶階、從僧伽尸國至忉

利天、其階中道瑠璃所成、兩邊階道悉用黃金、足所踐處

布以白銀、諸天七寶而爲間飾、余時優陀延王頂戴佛像、并

諸上供珍異之物、至如來所而以奉獻、佛身所造之像而對於

佛、猶如堆阜、比須彌山、不可爲喻、但有螺髻及以玉毫、少分

似於佛、而說偈言

佛在忉利天 爲母說法時 大王造像聲 遠聞善法堂 三十三

天衆 同音皆隨喜 未來世造像 獲无量勝福

雙卷優填王記云、佛上忉利天、一夏爲母說法、是時大王思慕

如來、遣三十二匠、及寶梅檀、請大目連、神力往令圖佛

相、既如所願圖了還返、座高五尺、在祇洹寺、至今供養云々

佛遊天竺記云、佛成道後八年、思報母恩、遂昇忉利天、爲

母說法、過夏經九十日、國王優填王思戀世尊、乃請大弟子目

犍連、攝三十二工巧梅檀香木、往彼天宮彫刻三十二妙相、

遂持下人間、置本精舍佛无坐所、余後世尊却從天下、其

像躬出、低頭問訊道侍於佛、余時世尊親爲摩頂、授記

之曰、吾涅槃後一千年外、當於東夏廣爲人天、作大饒

益、言說訖其像却還本位、於是世尊自移於兩邊小精舍之內、

與像異處相去二十步云々

今依諸經說、勘優填王所造佛像、觀佛三昧經說是優填大王

鑄金爲像、又阿含經說優填王勅國內匠人、以牛頭梅檀作

如來像、立高五尺、又雙卷優填王經文、優填王遣三十二

工、費梅檀木、請大目連往忉利天上、造得佛像、坐高五尺、

以是等說推之、優填大王戀慕如來、或鑄金容、或刻木像乎、

或可所見不同、隨機所說而已、又造像功德經云、優陀延

王戀慕如來、以紫梅檀、欲造佛像時、毗首羯磨天變爲好匠、

刻如來像、坐高七尺云々、有人曰、優填王優陀延王者梵語、新舊也、是一人之稱者、今見阿含經文各別人也、佛從天下人間時、五王往詣僧伽尸國之日、各自稱、優填是拔嗟國王、優陀延是南海之主也、何得稱一人之名乎、又阿含經曰、波斯匿王聞優填王造栴檀像、以紫磨金造釋迦佛像、置給孤獨園云々、西域記文似此說、今從西天傳、漢土、即牛頭栴檀五尺像也、古今作傳記人、只引造像經文、因之瑞像有濫而已、以彼不可指南者也、今所據是阿含經說也、佛當姬國昭王廿四年甲寅歲四月八日誕生、當穆王十一年辛卯歲、昇初利天、故知有瑞像已來、至周末乙卯歲、凡經卅一王、歷七百年四年、歷秦四十九年、歷漢前後合四百廿五年、歷魏四十五年、歷西晉五十二年、已上共計一千三百五年、後有梵志鳩摩羅琰、漢言童壽、持此瑞像東之振旦、行至龜茲國、々主白純留住此像、於內供養、西蕃廿餘國化之、无不歸敬、時白純王見羅琰聰明秀異、乃以長公主強而妻之、遂有羅什、々々未生而琰卒、臨命終時、誠其妻曰、吾不免此難償訖、吾滅後生此、若是男慎而抑留當令出家、此子必能多才、廣度人、余然後琰卒了羅什生、七歲

與母共出家、母證初果、什從師受經業、日誦千偈、々有三十二字、凡三萬二千言也、什年九歲進到罽賓國、遇槃頭達多、粹三藏九部、无不縷貫、爰罽賓王請達多、與什論議、深推服之、聲徹外國、諸方論師誰能對什焉、什小乘諸部皆學究、又至沙勒國時、僧衆一萬餘人疑非凡夫、後還到龜茲、從須利部蘇摩稟大乘、乃歎曰、吾學小乘、辟人不識金、以餘石爲妙矣、於是廣求義要、誦中百二論及十二門論等、有項什母辭往天竺、詣龜茲王白純曰、汝國尋衰、吾其去矣、行至天竺、進登三果、什母臨去謂什曰、方等深教應大闡眞丹、傳之東土唯尔之力、時什在王新寺、得大品經始就披讀、魔來蔽文、唯見空牒、什知魔所爲、々誓心逾固、魔去字顯、仍誦習之、後於崔黎大寺、讀大乘經、忽聞空中語曰、汝是智人、何以讀之、什曰、汝是小魔、宜時速去、我心如地不可轉也、停住二年廣誦大乘經論、洞其祕奧、龜茲王爲造金師子座、以大秦錦褥鋪之、令什陞而說法、後往罽賓爲其師槃頭達多、具沉一乘妙義、師感悟心服、即禮什爲師言曰、我是和尚小乘師、和尚是我大乘師矣、西域諸國服什神儀、咸共崇仰、每至講說、諸王長跪座側、令什踐而登焉、

其見^ノ重^{コト}如此^シ、什道震西域^ニ、聲被東國^ニ、爰後秦主苻堅、
建元丁丑歲正月^ニ、太史奏^ラ、有星見外國分野^ニ、當有大德智人、
入輔中國^ニ、堅素聞什名^ヲ、乃悟曰^ク、朕聞西域有鳩摩羅什^ヲ、將
非此耶^ニ、即遣驍騎大將軍呂光^ヲ、將兵十萬往伐龜茲^ニ、以取瑞
像及羅什克之^ニ、光初到龜茲國^ニ、王白純問光曰^ク、上將軍乍到^ニ、
計其疲勞^ニ、未審^ニ、將軍是何朝大臣^ニ、來侵遠國^ニ、此國也不
侵胡境^ニ、亦不犯漢壇^ニ、以葱嶺爲中分^ニ、到流沙是半界^ニ、牧牛裹
食^ニ、養象駝糧^ニ、又不朋^ニ、堅於剛強^ニ、又不欺^ニ、持於
寡弱^ニ、凡以經過使命^ニ、遣禮送迎^ニ、至於隣國往來^ニ、皆竭厚禮^ニ、
曾有負冤深處^ニ、仍須發問端^ニ、倪先無纖粟之酬^ニ、何乃忽興
師旅^ニ、況乎大國常聞是禮義之邦^ニ、若是秦朝^ニ、豈可有無
名^ニ、之伐^ニ、便擬開其帑藏^ニ、宴稿不辭^ニ、若要其封壇^ニ、
割之絕易^ニ、吉凶兩意^ニ、願訣一言^ニ、寡人專駐閤門^ニ、聽
其仁旨^ニ、時呂光報曰^ク、光啓^ニ、光以上祖伐紂左周^ニ、則安
危靜亂^ニ、有立國開邦之業^ニ、柄去邪除害之功^ニ、先是世代元
臣^ニ、累朝勳爵^ニ、光在秦則秦朝^ニ、滅楚則楚亡^ニ、辰長
地於平陸之間^ニ、生擒上將^ニ、倚雲梯於孤城之下^ニ、返縛逆

臣^ヲ、光以近別咸秦專權^ニ、甲馬來取^ニ、龜茲國王之罪所
有其四^ニ、第一且鳩摩羅什初離本國^ニ、即往秦朝^ニ、王
把傳法高^ニ、屈爲臣下^ニ、王罪其一也、第二經書梵夾本^ニ、使
弘宣^ニ、況當國土來聞深滯^ニ、人天演讚^ニ、王罪其二、第三梅檀
瑞像福利^ニ、群生因茲經過獨當留住^ニ、王罪其三、第四羅什
法師本朝秦闕^ニ、將闡佛宗^ニ、王恣強力^ニ、以留連^ニ、值賢仁而
教化^ニ、王罪有四、豈得无名^ニ、今龜茲國如魚在鼎^ニ、似獸
捉羅^ニ、門低而只待火燒^ニ、城小而勞打破^ニ、三月之內流血
成河^ニ、幸人望大王知機^ニ、審而才酌^ニ、不宣漢國秦朝驍騎
大將軍呂光謹啓云々^ニ、光凡經十年^ニ、廻至秦隴^ニ、聞苻堅已敗^ニ、
乃自都於姑藏^ニ、號後涼^ニ、即乙酉歲^ニ、今案羅琰到龜茲之年^ニ、
東晉第一主、高祖元皇帝丁丑歲即位^ニ、都於建業^ニ、號建武元
年^ニ、戊寅歲改太興元年^ニ、大興四年辛巳歲羅什生^ニ、以此逆
推^ニ、乃知羅琰是西晉之末、永嘉年中到龜茲也^ニ、光伐龜茲^ニ、
是東晉第九主、孝武皇帝寧康二年甲戌歲也^ニ、案東晉第五主
孝穆皇帝即位^ニ、至永和六年歲次庚戌^ニ、有前秦苻健起^ニ、自都
於長安^ニ、號皇始元年^ニ、至五年甲寅歲苻健卒^ニ、其子苻生經二年^ニ、
爲從兄苻堅所害^ニ、苻堅立號永興元年^ニ、即東晉穆帝昇平元年

丁巳歲也、永興三年符堅又改甘露元年、至七年乙酉歲、又改建元々年、止建元十年、遣將呂光、往伐龜茲、即東晉武帝寧康二年甲戌歲也、寧康四年改永泰元年、永泰八年癸未歲、符堅舉兵百萬以伐東晉、至明年甲申歲秋八月、晉孝武皇帝遣謝玄謝・黃桓伊等、以水軍八千拒之、大破符堅於壽春、明年乙酉歲爲大將軍姚萇、縊殺符堅帝於五將山新城佛寺、(頭注20)姚萇遂自立都於長安、稱後秦白雀元年、呂光歸既失主、乃自立於西涼、至晉第十主安皇帝丁酉歲即位、改年號爲隆安元年、隆安二年戊戌歲夏五月、後秦姚興遣將、往伐呂光、克獲之、得栴檀瑞像及羅什法師、而廻其年十二月廿日至長安、即是後秦弘始三年也、案後秦白雀八年壬辰歲、姚萇卒、其子姚興立、稱皇初元年、至五年丙申歲、改爲弘始元年、其年東晉孝武皇帝崩、於是安帝立、秦弘始二年即是晉隆安二年戊戌歲、姚興伐呂光之年也、呂光卒有子呂纂立、晉安帝義熙十一年乙卯歲、有大丞相宗公劉裕、舉兵北伐、破西長安、擒秦主姚泓、得此瑞像、宗公忻然、以文軒繡轂、迎歸江南曰、吾不圖、破人之國、吞人之地、却人之財、據

リヨセントス
イトロニス

人之子、所貴者得此聖像、眞國之寶也、乃置於龍光寺、々々々本名青園寺、道生法師講涅槃經處、感得龍來聽法、遂改爲龍光寺、爰晉安帝義熙七年辛亥歲、羅什卒、至義熙九年癸丑歲、秦姚興崩、其子泓立、即是秦弘始十八年也、至義熙十一年、姚泓被宗公所擒、遂得瑞像歸江南也、自東晉高祖元皇帝丁丑歲、至第十一主恭帝己未歲、宗公禪位之年也、凡一百三年云々

歷宗五十九年、歷齊二十三年、歷梁五十四年、爰梁祖武帝時、天監元年正月八日、夢栴檀像入國、因發詔募人、欲往迎其像、即聞昔優填王所造像在祇洹寺、遣決勝將軍郝騫・謝文華等八十人、應往達具狀、祈請舍衛王、此中天正像不可緣邊、乃令工匠更刻紫檀、人圖一相、卯時運手、至午便就、相好具足、而像頂放光、降微細雨、并有異香、騫等負此像、行數萬里、備歷艱難、又度大海四月、涉風波隨浪至山、糧食盡、所將人衆及傳送者、身多止歿、逢諸猛獸、一心念佛、乃聞像後有甲冑聲、又聞鐘聲、巖側有僧、端坐樹下、騫等負像下置其前、僧起禮像、騫等禮僧、々授澡灌令飲、並得飽滿、至天監十年四

月五日、^(頭注24) 竊達于揚都、帝與百僚途行、^{カチヨリ} 卅里、^{ニシテ} 迎還太極殿、^ニ 設齊度人、^ニ 大赦殺結、^ニ 是弓刀稍等、^ニ 並作蓮花塔頭、^ニ 帝由此菜蔬斷欲、^ニ 至太清三年五月崩、^ニ 湘東王在江陵即位、^ニ 遣人從揚都迎止至荆都、^ニ 承光殿、^ニ 供養、^ニ 後梁大定八年、^ニ 於城北造大明寺、^(頭注26) 以像置之、^ニ 至唐咸帝五年、^ニ 朝散郎狄仁瓘使還、^ニ 至荆府大明寺、^ニ 親禮此像者、^ニ 漢土雖有二瑞像、^ニ 竊負來是非優填所造眞像乎

又歷陳三十三年、已上共計二百三十二年

隋開皇九年己酉歲、^ニ 隋文帝遣晉王廣、^ニ 伐陳滅之、^ニ 便督于廣陵、^ニ 時有望氣者、^ニ 奏江南猶有異氣、^ニ 悉相訊問、^ニ 時有沙門智脫、^ニ 言此必是龍光寺瑞像也、^ニ 於是爲首、^ニ 請迎長樂道場、^ニ 煬帝改寺爲道場、^ニ 卽今開元寺也、^ニ 後有沙門住力、^ニ 募衆以起、^ニ 飛閣置像焉、^ニ 卽開皇十八年戊午歲也、^ニ 至二十一年辛酉歲、^ニ 復有沙門惠練、^ニ 燒臂割身、^ニ 以陳供養、^ニ 罄捨衣鉢、^ニ 以備莊嚴、^ニ 旣而隋文帝詔祕書監虞世南、^ニ 爲文樹碑以記其事、^(頭注27) 至仁壽四年甲子歲、^ニ 隋文帝崩、^ニ 明年乙丑晉王廣卽皇帝位、^ニ 號大業元年、^ニ 其年八月開汴河、^ニ 通楊州幸江都、^ニ 至大業十二年丙子、^ニ 後幸江都、^ニ 至十三年備常瞻禮、^ニ 案隋文帝辛

丑歲即位、^ニ 受周靜帝禪位、^ニ 于長安稱開皇元年、^ニ 至九年己酉歲、^ニ 滅陳後天下一統、^ニ 方入積算、^ニ 故云隋二十九年、^ニ 若隋文帝卽位二十四年也、^ニ 煬帝一十三年在位、^ニ 都計三十七年也、^ニ 又歷陳二十九、^ニ 又歷唐二百九十年、^ニ 卽天祐四年于今矣、^(陳滅事一統之後、自開皇九一計也) 時唐祚歸于大梁、^ニ 若至天祐十五年、^ニ 卽三百一年也、^ニ 此上共計三百十九年也

大唐高祖神堯皇帝大歲戊寅、^ニ 起自北京遷于長安、^ニ 改隋大業十四年、^ニ 爲武德元年、^ニ 案武德癸未歲、^ニ 有海賊李子通、^ニ 卽東海之賊也、^(頭注28) 據晉陵常州稱吳、^ニ 其年十月八日遣瑞像閣、^ニ 以造宮室、^ニ 時閣主住力法師、^ニ 發願焚身而死、^ニ 冀勉毀其閣、^ニ 至明年、^ニ 其李子通爲唐所滅、^ニ 其閣果得存焉、^ニ 後至唐第四主大周、^ニ 則天皇帝、^ニ 武代嗣位、^ニ 改大唐爲大周、^ニ 至廿一年甲辰、^ニ 改安長四年、^ニ 爲神龍元年、^ニ 其年詔改此長樂道場爲大雲寺、^ニ 繇是每月勅送香油・幡花・寶蓋・供養等具、^ニ 至第七主玄宗皇帝癸丑歲即位、^ニ 改開元々年、^ニ 至十八年庚子、^ニ 勅以年號便爲寺額、^ニ 詔海州史江夏李邕書、^ニ 乃稱開元寺焉、^ニ 至第十六主武宗皇帝辛酉歲即位、^ニ 改會昌元年、^ニ 至三年天下伽藍例遭除毀、^ニ 唯玆聖像儼然獨存、^ニ 樓閣凌虛、

殿堂摩日、香花若舊、禮敬如初、累代帝皇无不崇重、前後節

使罔不歸依、故自廣明已來、煙塵四起、文德之後、海宇沸騰、或待險以稱雄、或自我而作賈、蔗分鬻割、鴉張何止於

九州、建號行正、角立倍多於三國、大順二年辛亥歲秋八月十五

日、故司徒孫公早持一番節、曉縱兵機、勢盡數窮、制不由己、焚燒瑞像閣、據憂生民、捨此大部、就彼顯戮、是知不

有所廢、其何以興者哉、時有僧惠雲法師、勇猛精進、不惜幻身、於巨焰中、脫衣爲繩、號呼同力、出此瑞像、當忙

怖蒼卒之際、與首焚流等、以素舟輕棹、送于來方、置甘露寺

焉、明年太歲壬子八月、大祖武皇帝既梟巨盜、復擁雄師、

徇民之情、再理于等、於是兒聚郭、繕治甲兵、子育黎

毗、流順風雨、昨來狐菟、子可无窟穴之場、向者榛蕪後、作

笙歌之地、案大順三年壬子改景福元年、止三年甲寅、改永寧

元年、至五年戊午歲、又改光化元年、至四年辛酉、改天復元

年、四年甲子、改天祐元年、光化三年庚子歲、捨宅爲寺、其

年十月十六日、命於浙石、迎于瑞像、以處寺之南樓、即今光

化寺也、天祐十三年冬十二月三日、列宗景帝命、送其瑞像、歸

于開元寺、太歲已卯歲改唐天祐十六年爲武義元年、是大興主楊我

高祖宣皇帝龍飛九五、虎視寧瀛、信及豚魚、道齊堯舜、

既以重修紺殿、當闕白衣弟子鞠宗等十人、同力彫刻、其以臨戶

帳座、靡不儼持、迄至于今聲揚宇內、我大丞相都統東海

王之爲治也、或遇虛克、或鞏明刑、遠人未來、我助且耕且

戰、大信既冷、我則以安以和、以百行作衣裳、以六度爲茅宅、

是使黃金地上、終朝不起於塵埃、白玉毫前、此日倍多於瞻

敬、盡七曜照臨之所、八埏入貢之鄉、莫不一心稱爲眞佛者也

自有瑞像已來、至周末乙巳歲、凡經七百三十四年、若至西

晉末丙子歲、又經五百七十六年、若更至陳末戊申歲、又經

二百七十二年、若更至唐末丁卯歲、又經三百一十九年、若更

從天祐五年戊辰歲、至長興三年壬辰歲、又經二十五年、都合

此上五節共計一千九百廿一年、又從佛生已來、通算至今壬辰

歲、一千九百五十九年、凡三十二匝半、甲子更行九年也

瑞像佛約在龜茲六十餘年、在西涼呂光城十四年、在長安

姚興都十七年、在江南四朝一百七十三年、在廣陵長興壬辰

歲三百三十四年

後叙曰、夫至理无言爲招緣、故有言、法身无相爲利濟、

故有相焉、昔如來昇忉利之天、報摩耶之德、致優填王之感

戀、持（頭注40）香水以彫飾、割（ス）鬚、割（カ）鬚、割（コ）鬚、纏終、相好嚴備、與本身而无異、

將東夏而有緣、蓋以累劫修行多生忍辱、方得（下ヘリ）具大人相、爲

三界尊非忍辱、无以成辟容、非修行无以登滿覺、余後神僧東

邁、英主西迎、經姚呂而禮敬无虧、歷隋唐而香花不絕、伏自

祖皇定難、聖上乘軒、橫空之鴈塔聯題、入夜之鳧鐘樓響、

崇奉之道、胡可備言、十明叩與張實爲殊忝、固乏（ユ）贊時之

術、空懷奉（上）上之心、於添香換水之時、仰思綿歷觀大筆大牋

之說、有愧（リ）年花、是敢輒以謏文、重爲叙錄、規諸作者少爲

取焉、壬辰歲三月十有二日甲午記

件瑞像、李昱稱後唐時、自楊州開元寺迎請金陵長先寺、瞻禮

供養、至乾德三年甲午歲、爲（子歟）太宗大祖皇帝滅之、止唐名、後

從金陵迎東都梁苑城、安置右街、開寶寺永安院、又後今上

皇帝大內萬歲殿、右作紫雲閣、迎入瑞像、禮敬崇重于（ニ）今矣

自作記壬辰歲後、至于太平興國九年甲申歲、通前計二千單七年

雍熙二載乙酉二月十八日、於梁苑城左街明聖觀音禪院、借得

開寶寺永安院本寫取、日本國東大寺渡海巡禮五臺山僧盛算記

（コノ間一行アキ）

先師法橋上人爲果宿念、本朝永觀元年八月一日、駕吳越、商客

陳仁爽・徐仁滿等、歸船渡海、當太宗太平興國八年、着彼朝岸、

其後至十月蒙宣旨、得臺州使入京之間、十一月十八日、到

淮南楊州開元寺、安下地藏院、是爲禮拜栴檀瑞像也、而有閣

其像不坐、爰就寺僧尋問之處、答曰、瑞像始自晉代、至于大

晉高祖、代數百歲、安置於當寺、代々帝王供養、而達于僞吳、

大丞相李昱、僞改吳稱大唐之時、遷都江南、昇州金陵、建業城、

彼時件瑞像移以安置長先寺、即僞唐昇元年中也、當大朝大晉

大祖石皇帝之代矣、至太宗大祖皇帝乾德年中、破僞唐今陵、

擒僞主李煜、入京師之日、迎栴檀像、安置東京梁苑城、右街開寶

寺永安院中供養、太宗第二主今上皇帝迎入內裏、滋福殿、每日

禮拜供養、僧等到京之日、禮拜不難者、盛算住院之間、傳

寫此記早畢、十二月十九日到京、廿一日日本僧等入覲皇帝、

即蒙宣旨、與客省丞旨行首張萬進、共入左街明聖觀音禪院、

得住房安下、明年正月中蒙聖旨、巡禮京內大小寺院之後、經

奏聞、與張行首共參入滋福殿、大師并行人禮拜瑞像、三月奏

聞參五臺山由、隨賜公憑參山、巡禮山中之後、巡遊諸方聖

迹、其後歸到東京、爰大師有移造此像之心、欲奉造之間、其

羅琰持此瑞像、來赴東夏、晝則僧負像、夜則像負僧、遠涉嶮阻、備歷艱難、途過半界經、至龜茲、々々王白純留像供養、又又見羅琰、神佛洞爲駙馬、乃以長公主強而妻之、羅琰不獲勉、遂生羅什、々未生而琰早卒矣、羅什後生年始七歲、守羅琰遺教、共母出家、乃至周遊諸國、學窮大小、志雖在東土弘宣、國主白純不聽之、瑞像至龜茲、凡六十餘年、西藩廿餘國、莫不來歸矣、于時秦主苻堅帝、知聞此事、以建元十年甲申歲、遣大將軍呂光、征伐龜茲、取瑞像并什而來、此猶吾朝仁德御宇也、然呂光往龜茲之後、未歸秦朝之前、東晉孝武帝大將軍姚萇伐秦主苻堅、自立於長安號曰後秦、此亦仁德御宇也、爰呂光往反凡經十年、始廻于秦隴而聞秦主苻已敗、自立於姑藏稱曰後凉、因茲福之爲涼瑞像、什公亦在城矣、十四年後、々秦第二主姚興皇帝遣將軍伐呂光、取像及什來于⁽⁴⁾長安、即私始三年戊戌十二月廿日也、當吾朝十八代主履中天皇御宇、從余瑞像在秦都長安一十七年、其後東晉安帝義熙十一年甲戌、大丞相宗公劉裕舉兵伐長安、擒後秦第三主姚泓、迎此像歸于江南、以置龍光寺、當吾朝二十代主允恭皇帝御宇也、從余以來歷宗五十九年、齊廿三年、梁五十四年、陳卅三年、四朝通計一百七十九年、久在此寺矣、然後隋開皇九年己酉、文帝遣晉王廣伐陳滅之、迎像安楊州廣陵長樂道場、吾朝卅一代主、敏達天皇御宇也、從余以後歷隋廿九年、唐三百四十二年、久在此寺矣、但大唐則天皇神龍元年甲辰、改長樂道場號大雲寺、又至玄宗皇帝開元十八年庚申、勅以年號乃爲寺額稱開元寺、其後武宗皇帝會昌三年癸亥、天下伽藍例遭破滅、唯此瑞像儼然獨存、凡累代帝王・前後節使莫不崇奉矣、然至

昭宗大順二年辛亥、故司徒孫公早起亂焚寺、時有惠雲法師、勇猛精進、不惜身命、入巨焰中出此瑞像、便送朱方、安甘露寺、此時當吾朝五十九代主宇多院御宇、明年八月、大祖武皇帝既梟巨賊、再理于出、改大順三年壬子號景福元年、至光化三年庚申、捨宅爲寺、號光化寺、即迎瑞像安寺南樓、此猶宇多院御宇也、後至哀皇帝天祐四年丁卯、唐祚歸于大梁、同十三年丙子、列宗景帝命送其像歸于本開元寺、此時當吾朝六十代主醍醐天皇御宇也、然天祐十六年己卯、大吳主楊氏改爲武義元年、其後吳大丞相李煜僞改吳後唐、遷都于江南昇州金陵建業城、乃移像安金陵長先寺、即僞唐昇元年中也、當吾朝六十一代主朱雀院御宇歟、又至大宋太祖乾德年中、破僞唐金陵迎像、安東都梁苑城開寶寺永安院、至大宋太宗太平興國中、又迎入大內滋福殿供養、^{或大內萬歲殿在建紫雲閣安之}後太平興國八年者吾朝六十四代主、圓融院御宇、永觀元年甲申歲也、今年八月肅然上人・盛算闍梨等乘吳越商客陳仁爽・徐仁滿等船渡海、同十一月着宗朝岸、十二月到梁苑城、入觀皇帝、明年正月經奏聞入滋福殿、拜瑞像、三月又奏巡禮五臺山已下大小諸寺、爰上人有欲模造聖像之願等、仍經奏聞、即被勅許、出像於大內西華門外啓聖禪院、招雇彫佛博士張榮、令模造之^{上人往反首尾四年未云何年造之更檢}造功既畢、以彼朝雍熙三年丙戌、載臺州客鄭仁德船、奉迎德像、即吾朝六十五代主、花山院御宇^(コノ間一行アキ)、今年六十六代主一條院即位、改寬和三年號爲永延元年、上人歸朝之日、有勅迎像、入大內大極殿供養、其後上

人發願、欲以城乾阿多護五嶽擬五臺山、安置此像、奉祈聖朝、仍經奏聞、即被勅許、賜官符宣草創山寺、先於山下栖霞寺右邊建別精舍、且安瑞像、然山寺大功未畢上人早卒矣、遺弟盛算等雖守先師素願、其功未就、因玆聖像停此不及登山、遂號此精舍爲清涼寺耳、從余以來累代帝王・花夷尊卑見聞禮供于今不絕、故世人以爲山寺不就者聖意使然也、夫如來遺像本爲末代、若在深山幽絕之地、爭結薄俗瞻禮之緣、久停此平原、普化彼高下良有深由乎、然則瑞像始在西天、在世四十一年、滅後一千二百六十餘年、合一千三百餘年、始至龜玆淹留、龜玆六十餘年、通前具計一千三百六十八年、後始至振旦、遊化于振旦諸國、從秦至宋愍六百七年、通前一千九百七十五年後始至吾朝、從余以降至于今上弘安四年辛巳歲、凡歷二十七代二百九十六年、通前二千二百七十一年也。凡三十七甲子、餘有五十二年矣、嗚呼昔大王之德西天在世也、尚不勝九旬之戀慕、令親子之拜、東漸遺像也、何不生一念之渴仰、努力專深心、慎莫放逸矣、顯意因披閱盛算闍梨・開元寺十明法師記、并金陵長先寺楚一法師讚等、謹勘合本朝王代年代記等、以勒此流記、願以此因緣、必蒙彼引導、乃至見聞隨喜之人同得耳目開明之益、云尔

佛滅以來一千九百三十五年始至吾朝、從余至于今年二千二百卅年、加在世四十一年者、二千二百七十一年也

從造像辛卯至今辛巳、凡三十七甲子、餘有五十二年也